



なごや「聖歌」だより 5月号'10

見知らぬ、でも、馴染みのある・・・

新聖堂ができて、たくさんの方が見学者が訪れました。「別世界のような・・・」、「なんとも温かい」という感想を聞きました。

イギリスのカリストス主教は聖公会の信徒として生まれ育った方ですが、初めて正教の聖堂に入ったときのことを次のように語っています。

1952年の夏、土曜日、不意に起こったことです。17歳の私はバッキンガム宮殿通りをビクトリア駅へと歩いていました。ふと19世紀ゴシック風な古びた教会があるのに気づきました。入り口の金属プレートには「ロシア教会」とだけありました。

聖フィリップ教会、それが教会の名前ですが、入ってみると、最初は誰もいないと思いました。外は夏の日が輝いているのに、建物の内部はひんやりとしていて、薄暗い空間ががらんと広がっていました。教会ならあろうはずの長いすもありません。目の前には磨いた床が広がっているだけでした。

やがて私はそこが空っぽではないことに気づきました。聖所の中に信者がばらばらと立っていました。大半は老人でした。壁に沿ってイコンがかけられ、その前に明かりが灯っていました。東の奥にはイコノスタスの前にロウソクが灯されていました。どこかで聖歌隊が歌っていました。輔祭が至聖所から現れ、イコンと人々の前に香炉を

振っていました。祭服は古く、少々すり切れていました。

「誰もいない」という印象は全く変わりました。たくさんの方でいっぱいなのです。わたしの回りは目に見えない信者であふれていました。「ここで目に見えている会衆は、もっと大きな全体のほんの一部なのだ、ここで行われている祈りは、私たちを越えた、もっと大きな、時間と永遠、上のものと下のもの すべてを包み込み分割のできない祝いへと上げられていくのだ・・・」と。教会を出て、帰り道、はっきりわかりました。「ここは私のいるべきところ。私は家に帰っただけだ」と。

聖堂は全く別の世界への入り口です。神が人々を招くために用意されました。そこで礼拝が行われ、「神の世界へ」とさらにうながされます。聖歌はほかの礼拝の動きと協力してこの「神の国へ」という「運動」を支えます。だから、正教会の聖歌には「途切れ」がありません。たとえば「連祷」から聖歌が流れだし、聖歌から聖詠の誦経へと重なり合いながら続いてゆきます。ひとつひとつの聖歌の曲をバラバラにすることができません。礼拝全体が生きたまのだからです。プロテスタントやカトリックの礼拝との大きな違いがここに 있습니다。思わず引き込まれて、そこでかき見るのは見知らぬ、でもどこか馴染みのある温かい世界です。

聖歌練習

♪名古屋:

5月9日代式後、各主日聖体礼 儀後
聖神降臨祭(5/23)を練習します。聖神降臨祭は教会の誕生日とも言われる大切なお祭です。そのほかパニヒダ埋葬式も、練習してゆきたいと思います。

♪半田: 5月12日

聖神降臨祭を練習します。

5月の指揮当番

2日 マリア松島、16日 エレナ広石
23日 ピーメン松島 30日 エレナ広石

スナメニ研究会

次回

5月19日水曜日 1時30分～

先月は特別編として、滞在中のニコディモス修道士さんからポドーベンと呼ばれる単旋律の美しいメロディについてご教示いただき、実際に歌っていただきました。ポドーベン(ギリシアでは「アウトメラ」)は「特別のメロディ」と呼ばれ、祭日の特徴を音楽で表し、同じ系列の別の祭日や機会にも替え歌のように用いることができ、音楽で効果を高めます。ギリシアやロシアの祈禱書には「〇〇のメロディで」と記載されたポドーベンが100以上伝えられています。

今回はクリューキ記号の見直しをし、1調のフィタを見てゆきます。

4. コンダク（小讃詞）とイコス（同讃詞）

τὸ κοντάκιον; кондакъ / оikos; икосъ

コンダクは6世紀頃さかんに作られた長大な詩です。聖歌者ロマンはコンダクの作者として有名です。聖歌者はテーマとなる祭の内容や聖人伝を自由に展開し、細部まで解説した長大な歌を創作し、特別の服を着て、大聖堂の中央にしつらえられた階段状の壇（アンボン）に立って朗々と歌いました。8世紀になると帝国の衰退とともに聖歌創作の中心は修道院に移り、カノンが多く作られました。次第にコンダクはカノンの第6歌頌の後にその一部のみが残され、大半の部分は歌われなくなりました。カノンは旧約のテーマを基盤にしますが、コンダクはとくに旧約と関係なく物語が自由に展開されます。

当時のコンダクは同じ形式の韻律をもつ節（スタンツァ）（イコス）が24個も連なり、各節の終わりには同じ歌詞のリフレインをつけて歌いました。コンダクの第1節はプロエミオン（προοίμιον）あるいはククリオン（κουκούλιον）と呼ばれ節の終わりには同じリフレインがありますが、ほかの節と異なる韻律構造を持ちます。まず第1節（プロエミオン、ククリオン）で詩全体のメインテーマを短く要約します。続くイコスでテーマを次々と展開してゆきます。しばしば会話体で歌われました。

現在ではコンダクはククリオンと第1イコスのみに省略され、かつてのプロエミオン（ククリオン）がコンダクと呼ばれ、第1イコスがイコスと呼ばれています。

最古のロシア聖歌写本を見ると、コンダクはずでに縮小されています。例えば、13世紀の手写本、ヒランダル写本の聖歌集スティヘラリオンには、聖大金曜日の早課には、コンダク（コンダク全体から見るとククリオンのみ）と第1イコスのみが記載されています。

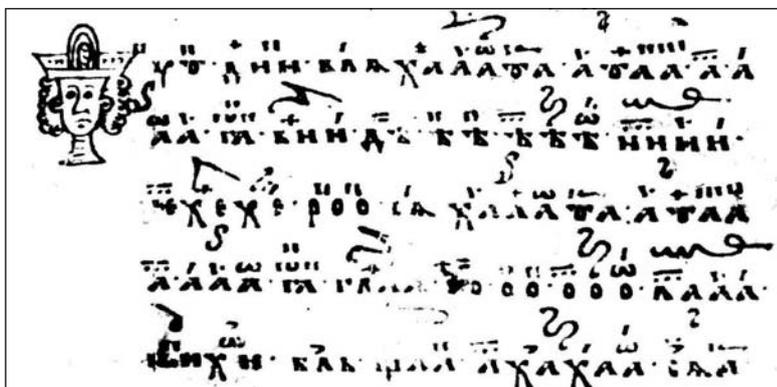
今日の祈祷書で、複数のイコスを持つコンダクはごく僅かです。例えば、乾酪の主日はコンダク（ククリオン）に加えて4イコスが残っていますが、祈祷書では4つがひとつのイコスとして記載されています。テーマはアダムの陥罪です。ククリオンと24イコスを含む完全なコンダクは司祭埋葬式に残っています。嬰兒埋葬式では4イコスの

みです。

かつてのコンダクが今でも全部歌われている唯一の例は大斎第5週の生神女のアカフィストです。これについては次回お話しします。

ロシアの古い写本を見ると、コンダクのメロディはたいへん装飾的で、高度な歌の技術が要求されました。ですから、コンダクがたとえユニゾンでも複数人数で歌われたとは考えにくく、ソロであったと思われる。コンダクの歌手は、コンダクを歌うために特別の服を身につけ、歌の報酬としてお金を受け取ったという記録もあります。別の史料には、聖大金曜日のコンダクの最後のリフレインを会衆が歌っていたという記録があります。ソロの歌手が節の大半を歌い、会衆は各節の最後のリフレインのみを一緒に歌いました。

様々なコンダク（ククリオン）はコンダカリ（κοντακάρια; кондакари）と呼ばれる特別の本に納められました。ロシア起源のコンダカリ写本は5種類しか現存していません。これらのコンダカリはスティヒラやイルモスのとは全く異なる特別な記号で記載されており（第3章参照）、そのためコンダクがスティヒラやイルモスとは全く異なる歌いかたをしていたと類推されます。特殊なコンダカリ記号はまだ完全に解読されていませんが、メロディは複雑で装飾的、彩り豊かでダイナミック、高度な声楽的技術を用いて演じられたことがわかります。この記号は古代ロシアのコンダカリでのみ見られることから、ラズモフスキーは、コンダカリ記号（кондакарное знаия）、歌をコンダカリ聖歌（кондакарное пиение）と名付けました。13世紀末になるとコンダカリ聖歌は次第に特徴を失い、記号も使われなくなり忘れ去られました。



11世紀末のコンダカリ表記

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
 詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia <http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料